

令和 5 年 5 月 30 日現在

機関番号：33917

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2022

課題番号：17K03001

研究課題名(和文) グローバル・シティズンシップの模索-日比の異文化コミュニケーションからの考察 -

研究課題名(英文) Exploring Global Citizenship: An Analysis from Intercultural Communication between Japan and the Philippines

研究代表者

森泉 哲 (Moriizumi, Satoshi)

南山大学・国際教養学部・教授

研究者番号：60310588

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,900,000円

研究成果の概要(和文)： フィリピン・セブを研究の場として、そこから描写される日本人のフィリピン人との異文化コミュニケーションの課題について明らかにした。興隆する英語教育産業によって、日本人のフィリピン人英語講師とのコミュニケーションの量は増加し、相互理解は深まっていた。また日本人社会人も一定程度のグローバル市民としてのアイデンティティを保持していた。一方、「白人性」や「ネイティブ信仰」を代表とする西洋中心的価値観も根強く、今後のグローバル・コミュニケーションのありかたを再考する必要があることが指摘された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

フィリピン・セブにおける英語教育産業との関連で研究を行い、その実態を異文化コミュニケーションの視点から、また日本人のグローバル・シティズンシップに関して社会心理学的研究によって西欧中心主義から脱却できていないという知見は学術的意義がある。またグローバル社会に関する現状の課題を指摘したことによって、英語学習者だけでなく広く日本人にとって、フィリピン人や多文化の人々と今後今後のコミュニケーションのあり方についての視点を提示したことについて社会的意義があると考えられる。

研究成果の概要(英文)： The current study clarified the challenges of intercultural communication by choosing Cebu, Philippines, as the site of the study. The amount of communication and mutual understanding between Japanese and Filipino English teachers has been increasing due to the rise of the English language education industry. Japanese adults also retained their identity as global citizens to some degree. On the other hand, Western-centric values such as "whiteness" and "native speakerism" persisted, indicating the need to reconsider the nature of global communication.

研究分野： 異文化コミュニケーション、対人コミュニケーション、社会心理学、英語教育

キーワード： 異文化コミュニケーション 英語教育産業 グローバル・シティズンシップ フィリピン

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

近年の異文化コミュニケーション研究は、国、人種、民族など比較的大きな文化を扱う際には、単なる文化差などの比較研究よりも、白人性、ポストコロニアリズム、文化帝国主義などの言説を欧米社会との関係から明らかにし、文化の不平等性を可視化してきた。特に日本との関係においては、欧米との関係性を通してその実態が明らかにされてきた一方、その歪んだ構造について、日本のアジア諸国との関係については未だ散見される程度であり、グローバル・コミュニケーションのあり方を検討する必要性が指摘されている。

この視点から、日比関係は有益な研究の場となる。フィリピンでは公用語が英語ということもあり、英語教育産業が興隆し、この10年で日本人学生も多く滞在し、フィリピン人とのコミュニケーションの機会が増加した。フィリピン人から積極的に英語学習だけでなく文化交流を行っているという肯定的な言説もみられる一方、英語圏への留学のバイパスとして、また安価な費用という観点からフィリピンが選択されている様子もうかがえる。つまり、グローバル・コミュニケーションの視点から検討すると、2つのまったく異なった方向性が指摘でき、現在どちらかに向かうのかという意味の競合の場となっている。非白人かつ非ネイティブ・スピーカーのフィリピン人から英語を学ぶということから、文化間の権力構造の表象としての「白人性」および英語はネイティブから学ぶのがよいとする「ネイティブ信仰」を打破できる可能性もある一方で、フィリピンは西欧諸国と比較して費用が安価であるという市場経済原理に基づき、差別的な言説が支配してしまう可能性も存在するため、今後の展開を注視していく場である。

また日本国内に目を移せば、日本社会は少子高齢化に直面し、人手不足を補うため、フィリピン人を含む外国人労働者が増加傾向にある。外国人技能実習制度改正の議論も活発になされ、日本社会は多文化共生を目指した社会づくりが急務と言える。コミュニケーション学及び社会心理学領域においても、集団間の信念やイデオロギーと個人行動のあり方を検討することによって、相互に暮らしやすい社会づくりへの検討が求められる。

これら国内外の視点からフィリピンと日本との異文化コミュニケーション研究を行うことは、諸外国の人々とどうかかわっていくのか、また日本国内の多文化共生の市民社会をどう構築していくのかを検討することとなる。とりわけ本研究はグローバル・シティズンシップの考え方や育成のあり方への回答を探るための端緒となると考えられる。

2. 研究の目的

本研究では、グローバル化が進む日本社会において欧米ではなくアジアの視点から一つのケーススタディとして日本とフィリピンの関係に焦点をおき、文化的に公正な社会構築を目指していくためのグローバル・シティズンシップはどうあるべきかを探索的に以下の2点から検討する。

第1に、近年フィリピンに英語学習を目的として渡航する日本人が増加傾向にあるが、フィリピンの英語教育産業の実態、また日本人英語学習者とフィリピン人英語講師のコミュニケーションの様子を明らかにするとともに課題を検討する。第2に、日本社会においても多文化化が進んでいることからどのようなグローバルな市民社会を構築すべきかの調査を行い、その結果から今後の社会のあり方に示唆を行う。

3. 研究の方法

(1) フィリピン人との異文化コミュニケーションに関する質的研究

フィリピンにおける英語教育産業の実態および異文化コミュニケーションに関しては、研究期間中計5回(各回1週間程度)フィリピン・セブを訪問しフィールドワークを行い、実際に英語学校を訪れ参与観察の他、フィリピン人英語講師にインタビューを行った。フィリピン人英語講師約30名から、日本とフィリピンの関係、自身のアイデンティティ、日本人学習者との異文化コミュニケーション上の課題等についてインタビューを行った。研究期間中の2020年3月から2022年8月までは新型コロナウイルスの影響によりフィリピンへの渡航ができなかったが、2022年8月に現地の聞き取り調査を再開し、新型コロナウイルスによる英語教育産業の影響についても聞き取りをした。

(2) グローバル・シティズンシップと多文化社会に関する量的研究

日本人が現在どのように多文化主義やグローバル・シティズンシップをどう捉えているのかについて日本人大学生および社会人計約500名を対象にウェブ質問紙調査を行った。インターネット調査会社に委託し、日本人社会人のうち既婚者を対象として実施した。また、多文化共生社会という概念を事前に提示し、関心があると答えた者を対象として、その人々の価値観や行動パターンについて明らかにした。質問紙は性別・年齢などの人口統計学的項目のほかに、グローバル・シティズンシップ、市民参加の程度、心理的ウェルビーイングの尺度項目から構成した。項目は文化変容イデオロギー尺度(Levin et al., 2012)、社会参加の頻度(ボランティア活動、コミュニティ活動への参加、慈善団体への参加等に関して)9項目、生活満足感5項目(Diener et al., 1986)、社会的充実感(Diener et al., 2009; Sumi, 2014)である。社会参加以外の項目は全て5件法(1-強くそう思わない、5-強くそう思う)で測定を行った。社会参加については6件法(1-全く行わない、6-毎週行う)で頻度を測定した。

4. 研究成果

(1) フィリピン英語教育産業の実態

フィリピンの英語教育産業について先行研究をレビューし、その歴史と実態について考察を行ったところ、以下のような特徴が得られた(森泉, 2019)。まず、フィリピン留学の利点として、費用対効果の視点から欧米諸国の留学と比較して優位性があり、マンツーマン授業を主軸として構成される英語教育によって、日本人学習者は英語学習が集中して行われる環境に身を置けるとともに、授業外では学習者の興味・関心に応じた経験ができるということが挙げられた。

一方で、社会的正義に基づくグローバル・コミュニケーションを、「世界の様々な文化の差異をお互いに認め合い、文化間や人々の上下関係なく、一人一人が主体と責任を発揮しながら平等に参加するコミュニケーション」と捉えると、フィリピン留学は主に3つの課題を抱えていることを指摘した。第1に、価格が安価ということが大々的に宣伝されていることから、フィリピン人は安い労働力であるというステレオタイプの言説が支配的となり、対人コミュニケーション場面においても、フィリピン人を格下に見下し、安く英語を教えてくれる商品として講師を認識してしまう傾向につながる可能性である。

第2に、フィリピン留学は、欧米留学の代替物として、またその準備として位置づけられる傾向があり、結局西欧中心主義ひいては英語を母語とする国々の優位性がさらに強固になってしまう可能性がある。第3に、欧米留学では、現地の文化・社会に対する学習や現地の人々との交流が当然の前提となっているにもかかわらず、フィリピン留学では日本人に

あう英語教育や滞在スタイルを提供することが強調されている。このことからフィリピンは、あくまで日本人にとって便利であるという主従関係が想定されることが懸念され、欧米社会に対してとは異なる力学が働いている。

この3つの課題を乗り越えれば、フィリピン留学は従来の西欧中心主義及びネイティブ信仰を打開できる新たな可能性を秘めた場となりえる。そのためには、単なる英語学習とするのではなく、英語を通してフィリピンやグローバル社会について学ぶ教育内容の整備がなされるべきであり、日本人学習者、学校経営者、フィリピン人講師も現在の見過ごされている言説に気づき、根強く社会正義を目指したコミュニケーションを志向していく実践および研究が急務である。オンライン授業も一般的に普及し、ますますグローバルな人間関係を構築しやすくなった現在、英語学習やコミュニケーションの仕方の変化とともに、異なった言語や文化背景の人々とのコミュニケーションや関係構築の仕方が問われている。

(2) 日本人とフィリピン人との異文化コミュニケーションの質的研究

約30名のフィリピン人講師からそれぞれ約1時間程度のインタビューを通して、フィリピン人英語講師のアイデンティティのありよう、そして日本人との異文化コミュニケーションの課題について以下の4つの特徴的なテーマが語られた。質的研究は決して一般化することが目的ではないが、複数の講師から語られた内容はある程度フィリピン社会の実情を反映しているものと解釈できる。

第1の特徴は「積極的なアイデンティティ探索」である。フィリピン人講師のアイデンティティは、国、職業、社会的地位、世代、ジェンダーなどが複雑に交差しながら、積極的に探索されている。フィリピンでは、大学卒業後の二大就職先として、英語学校講師かビジネス・プロセス・アウトソーシング企業におけるコールセンターのスタッフかであるという。多くの20代の講師が共通に語っていたことは、英語講師の仕事は、自己成長とともにさらに安定した職場を求めて今後の踏み台としての役割であるという。しかし、一度得た仕事に対して中途半端に行っているというわけではなく、多くは「講師であることは、私のパッションである」という語りにもみられるように、この仕事には満足しつつも、他の可能性があるのではないかというアイデンティティの揺れ動きとして解釈することも可能である。

第2の特徴は、「グローバル社会に開かれたアイデンティティ」という点である。もともと歴史的にもフィリピン人は、国内の就職先に限界があり、海外労働者(OFW, Overseas Filipino Workers)として海外に出稼ぎにでる傾向が強い。英語講師においても、より待遇がよい東南アジア諸国連合(ASEAN)のタイやベトナムを目指すということも多い。賃金でも、現在の賃金の5倍程度となり、家族に仕送りができるだけでなく、自分の生活も金銭的により豊かになるということだ。このようにフィリピンではより良い職業環境を求めて、ASEANだけでなく、中東諸国へも仕事を求めており、彼らのアイデンティティ探索はグローバルに開かれている。

第3のテーマとして、「日本人の間接的コミュニケーションへの葛藤」が挙げられる。日本人学習者とのコミュニケーションについては、まだ彼らが英語学習初級・中級者であることから、うまく伝わらないことは頻繁にあるものの、それは英語学習上仕方がないことだとあまり問題視はしていない。むしろ、日本人の間接的なコミュニケーションのあり方に問題を抱えている。授業中に日本人学習者から授業内容・方法に対して特段の指摘がなかったにもかかわらず、授業後日本人スタッフから学習者から苦情があったとの報告が寄せられたことがあった経

験を複数の講師が語っており、彼らはその間接的かつ過度の顧客満足度を重視するやり方に葛藤を感じているようである。この傾向はオンライン授業でなお顕著となり、日本人学習者の授業評価が星の数と得点でフィリピン人講師のプロフィール画面に掲載され、点数が高い講師が画面のトップにあらわれ、それによって授業の予約がなされるモデルがすでに定着してしまった感がある。商品購入の評価と同じように講師が評価される方法が主流になり、フィリピン人講師は英語で生計を立てることができるという特権がありながらも、本評価方法の犠牲者となっている。

さらに犠牲者としての言説として、フィリピン人は安価な労働者として見られているという強力な言説もある。あるフィリピン人講師は、「日本人はここはなんでも安い、安い、安いというが、その言い方はちょっと攻撃的に聞こえる」ということを吐露しており、値段のみに注目せずに、英語教育の質や文化的交流といった相互関係面に注目すべきであると指摘している。

このように、西欧の支配構造がフィリピンでも見られ、英語話し手としてそれを生計に役立てているという特権を享受している一方で、フィリピンの英語学習を欧米圏の留学の準備として位置づけ、英語上達的手段としてしか見ていない日本人学生との関係性にフィリピン人講師は失望するという犠牲者としてのアイデンティティおよびその揺れ動きが明らかとなった。今後、このような言説を切り崩していくための社会の変容や教育がなされなければならない。

(3) グローバル・シティズンシップと多文化社会

これまで、日本では多文化共生社会を目指そうとする実践や提言はみられるものの、多文化社会に関連する社会心理学的研究はまだ十分ではなく、イデオロギーの違いによる影響等がまだ十分に精査されていないため、文化変容イデオロギーと社会参加の関連についてグローバル・シティズンシップの視点から調査を行い、英語論文にまとめた(Moriizumi, 2022)。

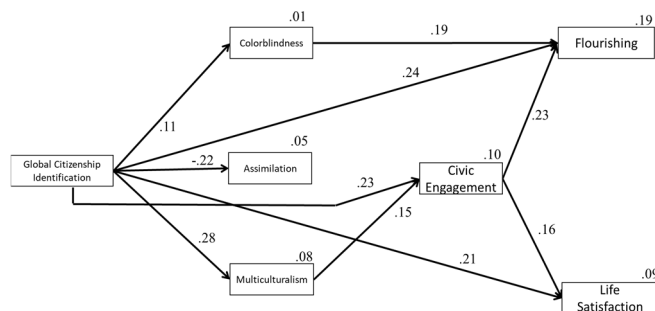
日本人学生および社会人に対してグローバル・シティズンシップと社会的態度との関連を調査し、共分散構造分析によってモデルを検討した結果、グローバル・シティズンシップは、多文化主義的価値観および人種・民族等の違いはあまり重要でなく人間の普遍性を強調するカラーブラインド的な価値観を促進することが明らかとなった。さらに多文化主義的価値観が、ボランティア活動などの社会参加を促進し、それが生活満足感ならびに社会的充実感に肯定的な影響を及ぼすというモデルが適合度的にも理論的にふさわしいことが見出された ($\chi^2(8) =$

19.97, $p = .01$, $\chi^2/df = 2.50$, $GFI = .99$,

$AGFI = .97$, $RMSEA = .058$)。このこ

とから、日本人がより異文化に対して寛容かつ包摂的態度を保持するためには、グローバル・シティズンシップの育成も重要であることが指摘できる。また本結果は、文化集団の多様性を無視するのではなく、集団の違いを認め

合うことが、社会へ積極的な参加や貢献度を高め、生活の質を高めることにつながることを示唆している。一方で、人間の共通性をことさら強調するカラーブラインド的イデオロギーは日本社会の中では肯定的にとらえられているようであるが、アメリカ社会ではむしろマイノリティの苦境を覆い隠すものとして否定的に捉えられている。ますます多様な人々が暮らす社会になることを想定した場合、カラーブラインドネスの概念、また他のイデオロギーとの関連を含めて、多文化社会のありかたの検討がさらに必要とされる。



5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計7件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 MORIIZUMI, Satoshi	4. 巻 49 (2)
2. 論文標題 Who Seeks Social Support from Whom?: Considering Impacts of National and Familial Cultures from Socio-Ecological Perspectives	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Japanese Journal of Communication Studies	6. 最初と最後の頁 79-100
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 森泉 哲	4. 巻 21
2. 論文標題 海外フィールドワークの意義と課題 GLSフィールドワーク (フィリピン) の実施を通して	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 アカデミア 人文・自然科学編	6. 最初と最後の頁 155-167
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 森泉 哲	4. 巻 107
2. 論文標題 フィリピン・セブにおける語学学校の現状と展望 グローバル・コミュニケーションの視点から	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 アカデミア 文学・語学編	6. 最初と最後の頁 145-160
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 胡穎傑・森泉哲	4. 巻
2. 論文標題 コードスイッチングとアイデンティティの揺れ 在日中国人留学生を対象にした一考察	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 社会言語科学会第44回大会発表論文集	6. 最初と最後の頁 242-245
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 森泉 哲	4. 巻 19
2. 論文標題 NTL, 組織開発とダイバーシティ	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 人間関係研究	6. 最初と最後の頁 11-21
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 森泉 哲	4. 巻 第8・9号
2. 論文標題 対人コミュニケーション研究者がなぜシティズンシップに関心を持ったのか	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 JCA中部支部 ニューズレター	6. 最初と最後の頁 5
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 森泉 哲	4. 巻 39
2. 論文標題 社会参加はいかに促進されるのか? - 個人及び家族要因とウェルビーイングとの関連 -	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 南山大学短期大学部紀要	6. 最初と最後の頁 191-201
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計7件(うち招待講演 0件/うち国際学会 2件)

1. 発表者名 森泉 哲
2. 発表標題 多文化主義は社会参加を促進するのか? グローバルシティズンシップとの関連
3. 学会等名 日本心理学会第84回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Moriizumi, Satoshi
2. 発表標題 Can Being a Global Citizen Contribute to a Local Society? Impacts of Global Citizenship on Intergroup Ideologies and Civic Engagement
3. 学会等名 22nd Annual Convention of Society for Personality and Social Psychology (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 胡穎傑・森泉哲
2. 発表標題 コードスイッチングとアイデンティティの揺れー在日中国人留学生を対象にしたー考察ー
3. 学会等名 社会言語科学会第44回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Moriizumi, S.
2. 発表標題 Assimilation, Multiculturalism, and Colorblindness: Intergroup Ideologies and Civic Engagement
3. 学会等名 21st Annual Convention of Society for Personality and Social Psychology (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 森泉 哲
2. 発表標題 多文化主義は社会参加を促進するのか？ - 文化変容イデオロギー，社会参加，ウェルビーイングとの関連
3. 学会等名 日本社会心理学会第60回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 森泉 哲
2. 発表標題 藤巻光浩・宮崎新編著「グローバル社会のコミュニケーション学入門」合評会
3. 学会等名 日本コミュニケーション学会中部支部研究会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 森泉 哲
2. 発表標題 社会参加とコミュニケーション
3. 学会等名 2017年日本コミュニケーション学会中部支部大会
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 藤巻光浩・宮崎新・佐藤良子・田島慎朗・平田亜紀・福本明子・宮脇・山田かおり・森泉 哲	4. 発行年 2019年
2. 出版社 ひつじ書房	5. 総ページ数 287
3. 書名 グローバル社会のコミュニケーション学入門	

1. 著者名 Iva Katzarska-Miller, Stephen Reysen, M Faucher, Angel D. Armenta, Jessica R. Bray, Michael A. Zarate, Mark Cleveland, Simon Ozer, Milan Obaidi, Nur Soylu Yalcinkaya, Sheila Crocher, Jessica McKenzie, Emily Leighton, Macy Davis, Jose J. Reyes, Satoshi Moriizumi, Courtney Smith, Nadine Etzkorn, & Gerhard Reese	4. 発行年 2022年
2. 出版社 Palgrave Macmillan	5. 総ページ数 345
3. 書名 Globalized Identities: The Impact of Globalization on Self and Identity	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------